

第 28 回いたばし国際絵本翻訳大賞 英語部門 講評

今回の課題絵本 HOME IN THE WOODS は、お父さんが亡くなり、お母さんと 8 人の子どもたちが森の中のボロボロの一軒家に引っ越してきたところから始まります。語り手は二女で六歳のマーヴェル。お母さんは、ほら、宝物が見つかるかもしれないわよ、と子どもたちを元気づけますが、マーヴェルには、とてもそんなふうには思えません。荒れ果てて、寒々としたこの小屋が、「home」だなんて……。

ところが、中に入ってみると、地下室には空っぽのガラス瓶や端切れの山、庭の落ち葉の下には豊かな土が隠れていました。カエルや小鳥たちの声がひびき、カバヤポプラの木の生い茂る森は、マーヴェルたちに川魚やベリーやシチメンチョウなどの恵みを授けます。色とりどりの食料が詰められたガラス瓶が、地下室を徐々にいっぱいにしていくようすは、まさにマーヴェルたちの生活が満たされていくのを象徴しているようです。

物語は夏から始まり、秋、冬、そして最後に、あらゆる命が芽生え、再生する春で幕を閉じます。最後のページには、左手前にマーヴェルの後ろ姿があり、彼女の目から見た「home」のようすが美しく描き出されています。マーヴェルの一家と共に一年をすごしてきた読者も、希望と幸福感をもって本を閉じることができるでしょう。

今回の課題の範囲ではありませんでしたが、最後の著者のあとがきから、マーヴェルは著者のイライザ・ホイラーさんの祖母だったことがわかります。イライザさんの祖母は 1932 年の世界大恐慌のさなかに家を立ち退かなければならなくなり、この絵本で描かれているとおり、ウィスコンシンの森の奥にある小屋に引っ越しました。お父さんを癌で失ったお母さんと八人の子どもたちは、懸命に働いて、力を合わせ、厳しい自然の中でなんとか暮らしを営んでいきます。それは決して楽な日々ではありませんでしたが、同時に、イライザさんの祖母やそのきょうだいたちにとって、その小屋で暮らした 5 年間は、今でもいちばんすてきな思い出として記憶されているそうです。

そんな思いが詰まった絵本を、みなさまが楽しんで訳して下さったことを願っています。

さて、一次審査では、

- ・読みやすい文章になっているか（ちゃんと日本語になっているか）
- ・絵本にふさわしい言葉・漢字が使用されているか（対象年齢が意識されているか）
- ・誤訳はないか
- ・原文にない勝手な補足（不必要な付け足し）がされていないか
- ・誤った日本語が使用されていないか
- ・誤字脱字はないか
- ・台詞の口調がその登場人物にあっているか。また、作品内で統一されているか（途中でキャラが変わっていないか）
- ・不必要・不自然と思われる極端な幼児語が使われていないか

などの基本的なことに加え、文法を中心に間違いやすいところなど 90 近くのチェックポイントを作り、評価しました。主なもの（まちがいが多かったもの）をいくつか、例として挙げておきます。

P.05 you never know

楽観的なニュアンスを含んだセリフなので、それを反映した訳に。お母さんが子どもたちや自分の気持ちを引き立て、前を向いてがんばっていかようとしているニュアンスが出るように。「ひょっとしたら宝物が見つかるかもしれないわよ」など。

P.08 do fine

「do fine : (will を伴って) 十分 [満足] である 」という意味を汲み取って、違和感なく訳す。「これならなんとかやっていけるだろう」というニュアンス。

P.09 to find

目的（見つけるために掘った）ではなく、結果（掘ったら見つけた）であることを理解できているか。

P.09 old garden

この「old」は「古い」ではなく「前の家」を指す。「garden」はいわゆる「家庭菜園」。garden を訳出せずに「前の家からもってきた種」のように意識するのも OK。

P.13 secret paths

いわゆる「けもの道」。訳としては「ひみつの通り道」など。「paths」と複数形であることにも注意。woven all around 「woven」が「paths」にかかっていることが読み取れているか。

P.21 basics

「生活に最低限必要なもの」という意味が読み取れているか。訳としては「よけいなものは買えなかった」など、工夫する。

P.28 plunder our stores

stores=蓄え。今夜は特別大盤振る舞い（頑張ってごちそう）というようなニュアンスが読み取れているか。

また、絵本ということで、絵と訳文が合っているかについてもみました。今回は地図もついていましたから、そういったところもちゃんと見て、訳してくださるといい文になると思います。

P.07 filled with

絵に合わない訳（「地下室に物がぎっしり」など）にならないように注意。

a tin pail

「桶」や「バケツ」というよりは、「ブリキ缶」「牛乳缶」「ミルク缶」などのほうがイメージに近い。

a pile of rags

絵に合わせる。「ぼろ布」ではなく「はぎれ」。これは、あとのパッチワークの場面にもつながるので要注意。

P.20 pearly sweets

真珠のように丸くて、ぴかぴか、つやつやした、光沢のあるおかし（キャンディなど）のイメージ。絵に合う訳にする。

P.23 mud sweets

絵がケーキっぽいので、「sweets」は「ケーキ」でも OK。

こうしたチェックを経て、**応募の 790 作品中、30 作品**が最終選考に進みました。

最終選考では、一步踏みこんで絵本のテーマや魅力をじゅうぶん伝えられているかどうか、そして、日本語として耳で聞いて心地よいか、声に出して読んで楽しいか（絵本は読み聞かせることも多く、耳で楽しむ文芸でもあると思います）といったことを、審査しました。

最終選考に残った作品は誤訳もほとんどありません。あとは、ストーリーへの理解の深さや、物語の流れをうまく伝えているかどうか、などを評価しました。

例えば、最初の「**Dad lives with the angels now**」(2)。その上に描かれたロケットにお父さんの写真が入っていることからわかるように、お父さんは亡くなって「今は天使たちとくらしている」ということです。そのまま直訳しても、もう少し踏み込んで、「天国にいる」「お空で天使と暮らしている」などの表現でも、お父さんが亡くなっていることが伝われば OK としています（お父さんが亡くなったということが伝わりにくい訳もありました）。

そして、ここの訳を踏まえて、「**whispering to the stars**」(31) も訳せるといいと思います。ここは、お母さんの表情からも、おそらく亡き夫（お空のパパ）に話しかけていると思われます。直接的にそう書いてあるわけではありませんから、「星になった夫に話しかけている」といったような意訳は問題ですが（ここは、読者の想像力に委ねたいところですね）、「星たちとおしゃべりしている」など楽しそうな訳だと、作品の真意が伝わらないように思いました。

最終選考に残った方はみなさま、読み取っていらっしゃいましたが、「**like I feel inside**」(4) はやはり大切などころだと思います。寒々しくがらんとした小屋を、マーヴェルが自分の心の中と重ね合わせている場面です。ここは、最後の P.37 と同じ表現であることに注意し、季節がめぐって、マーヴェルの心と共に小屋の印象も変化したのを意識して訳すことが大切です。

このように、響きあっているページにちゃんと気づけているかは、とても重要です。翻訳をしているとついつい、そのページだけ、その行だけ、その一単語だけをうまく訳そうとしてしまいがちですが、物語

を訳すということは流れを訳すということでもあります。例えば、「echo through the trees」(11)なども、似たような文章がP.15、P.23、P.35にあり、カエル、小鳥、主人公たちの声が森に響いています。この関連性を意識しながら訳すと、俄然、物語が生き生きすると思います。

「Lowell fills his empty belly」(14)なども腕の見せどころですよ。ユーモアを感じる訳になっていれば、理想的です。

あと、忘れてはならないのが、絵本翻訳に欠かせない「リズム」です。「up and down/up and down」(7)などが、わかりやすい例でしょう。読み聞かせる時に自然とリズムが生まれるような訳にしたいところです。また、今回は、改行が多く取り入れられているページがたくさんありました。これは、絵本のデザインという点からも重要なので、原文が5行なら訳文も5行、原文が8行なら訳文も8行、というように、長さを合わせて訳してください。

これらのことを考慮したうえで、最終的な決め手となったのは、語り手が6歳のマーヴェルであることを意識した訳になっているかどうか、でした。厳しい自然の中で逞しく生きる女の子ですから、必要以上に幼児語にする必要はありません。けれども、物語は、そのくらいの年齢だった著者の祖母が、実際見聞きし、経験し、感じたことから生まれています。だからこそ、読者の胸に迫るリアリティを獲得しているのではないのでしょうか。ですから、その視点がぶれてしまうのはとても残念です。さらに、主な読者である子どもたちにとっても、6歳のマーヴェルの視点はとても大切です(例えば、この物語がお母さんの視点から語られていたら?と考えると、わかりやすいですよ)。

「ダル と ビアが じめんをほると、でてきたのは/やわらかい/まっくろの/げんきな土(つち)」
「ママが 町(まち)で おてつだいの おしごとをはじめたので/こやの おしごとをするのは こどもたち」「だけど、ママがはたらいてもらえるお金(かね)では/ほんとうに ひつようなものしかかえない」「いまでは まるでちがってみえる。/あたたかくて/あかるくて/愛(あい)が いっぱい/わたしも ちょうど そんなきもち」【「あ」で頭韻を踏んでいて、読んでいて心地よかったです】
(大賞の方)

「おまけに、みずくみポンプ もあって/ギッコン ギッコン すると/つめたくて きれいなみずが、ザーって でてくる」「ごきげんな カエルたちの がっしょうが、もりじゅうに こだまする」「…ベリーで パンパン/はらぺこ ローウェルの おなかも パンパン」(優秀賞の方)

絵本は、目で見、耳で聞く文芸です。そして、翻訳は、そこに書かれていることを①読み取り、それを日本の読者に②伝える作業です。わたし自身は、翻訳するときにもそれを自分に言い聞かせるようにしています。

最後に、わたしがかならず言うことですが、その作品への理解/思い入れが翻訳にはとても大切な要素だと思います。翻訳とは精読である、とよく言いますが、まさに翻訳はその作品を味わい尽くせる楽しい作業だと思っています。そんな愉しみを、みなさまが見つけてくださいますように。

英語部門 審査員 三辺律子